茗荷

花村かおり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
茗荷

【Ｎコード】
Ｎ７１１１Ｙ

【作者名】
花村かおり

【あらすじ】
本当の恋をしたことがない２５歳の女性が、大人の恋に飛び込んでいく

茗荷１

その日は秋の長雨が終わり、天気の良い日だった。直子が勤める会計事務所は少し古いビルにあり、エアコン配備されているものの、ビルの設計が悪いのか、室内は少し汗ばむくらいであったが、直子は淡々と仕事を進めていた。

公認会計士の先生が１名、従業員４名、パートさんが３名の小さな事務所ではあるが、それぞれが担当毎に仕事を上手く回し、また人間関係もとても良かったこともあり、直子にとっては居心地の良い職場だった。直子は大学で会計を学び、公認会計士の第１段階となる試験は合格しており、この事務所で実務を経験しながら、残りの試験に合格して、ゆくゆくは公認会計士になり、独立などを考えていたが、居心地の良さに、ずっとこのまま補助者でも良いと思ってしまう。

年度末調整の時期は、ものすごく忙しくなるが、それ以外は残業も少なく、自分の時間もとれた。その日も定時を少し過ぎると、次々と社員が「おつかれさまです」と声をかけて帰っていった。直子もそれに違わず、挨拶をして事務所を出た。

事務所は直子の自宅から１駅ほど場所にある。晴れた日は１駅、３０分ほど歩いて帰ることが多かった。その日も天気のよさにつられて、３０分歩いて家路についた。

直子の自宅は閑静な住宅街であったが、その中にぽつんと理容店と日本料理屋が２店並んで、商売を営んでいる。直子の家はその「ぽつん」の１つの理容店であった。日本料理屋は１つ小さな道を挟んで向かい側にあった。

家に帰ると両親が数名のお客の対応をしていた。お店は８時まで営業していたから、夕飯は直子が作ることが多かった。

昼間に母親が買ってきた食材を利用して、簡単なおかずを作って、食卓に並べるとその日の仕事が終わったような気がした。本来なら

ば、両親の仕事が終わるのを待って、一緒に食事をするのだが、その日はその気になれず、一人先に夕飯を済ませ、自分の部屋に戻った。

直子にはつい最近まで恋人がいた。大学時代の一期先輩で、テニスサークルで知り合った。大学時代から付き合っていたのではない。卒業してから、ＯＢ会で再開し、自然の流れで付き合うようになった。特にお互い猛烈に好きだったという訳でもなかった。でも、お互い気が合う相手だったし、付き合っている間は楽しかった。しかし、別れる数ヶ月前から詳しいことは良く分からないが、会社の経営が危うくなり、彼も仕事に付きっ切りになっていた。一週間に一度ぐらいは時間を作って、会うようにしていたが、それもままならなくなった。直子が心配してメールをしても、返信はほとんどなくなった。今年の夏の終わりに「私のこと忘れちゃったのかな？会いたくないのかな？」というようなメールを送った。それから、何度メールを送っても、返信が来なくなった。病気でもしていないかと、心配になって、昨夜、携帯に電話をしてみたら、着信拒否となっていた。そのとき、捨てられたのだと認識した。こんなこと生まれて初めてだった。

なんで捨てられたのか分からない。でも、受け止めるしかないのだ。よくよく考えてみれば、彼の外見も性格も好きではなかったような気がする。彼のことを本当に愛していなかったのだと思った。悲しくもなんともなかった。ただ、彼が不誠実であることに失望した。こんな風に簡単に捨てられてしまう自分が惨めになった。

「まあ、こんなこともある。考えても仕方ない。」と声を出していった。

すると母親が私の部屋に入ってきた。

「直ちゃん、もう寝ちゃったの？」

「寝る訳ないじゃない、まだ８時前だよ。」

「だってご飯先に食べちゃったみたいだから。」

「ああ…、ちょっと、勉強しようと思って。」

その割には参考書もノートも広げていないのを母親は気づいてか、「あら、そうなの。勉強中悪いけど、笹屋さんに茗荷、分けてもらってきてほしいの。お父さんがどうしても冷奴の薬味に食べたいんだって。」と言った。

「うーん。わかったよ。」と私はしぶしぶ椅子から立ち上がり、笹屋に向かった。寿屋は向かいの日本料理屋さんのことである。笹屋の裏庭では、この時期になると茗荷が自然に生えてくるのである。私は道を横断して寿屋の勝手口に向かった。

茗荷２

とんとんとドアをたたいて「すみません。」と声をかけると「あいよ。」と威勢の良い女将さんの声が聞こえてきた。
寿屋は料亭のような品の高級料理をメインに固定客を抱えていて、景気も良いみたいだった。中からはお客さんの笑い声が聞こえていた。
「あら、直子ちゃん、今日はどうしたの。」
「すみません、父が笹谷さんの茗荷がほしいっていうもので、分けてもらえませんか？」
「いいわよ、芳夫さんは茗荷が好きだものね。ねえ、誠二さん、庭から茗荷とってきてあげてよ。」と女将さんは言った。
誠二さんはこの料理屋の板前さんである。板前らしく、白い帽子と衣装を身につけていた。髪の毛も短く、皆が抱く板前さんの典型のような清潔さを持っていた。
「ええ、いいですよ。」と言ってので、
「私も一緒に取りに行きます。」と誠二さんについて行った。
当初はその前は女将さんと旦那さんの二人で切り盛りしていたが、誠二さんは直子が高校生のころ、この店にやってきた。神楽坂の有名な料亭で働いていたのをやめて、この料理店に勤めるようになったと聞いていた。誠二さんが勤めるようになってから、料理店は繁盛するようになったように思える。年に何回か家族で食事に行くことがあるが、誠二さんが作った料理は全て、美味しかった。女将さんも旦那さんも誠二さんのことを一目おいているようであった。
裏庭で誠二さんは茗荷を見繕って、４束摘み取って直子に見せた。
「お父さんはこれで満足かな。」
「ええ、こんなにいただければ大満足です。ありがとうございます。」と答えた。
誠二さんには妙な色気がある、飾らない板前さんの格好で、年も４

0は過ぎているだろうに、一言、一言に色気を感じた。
「ここの茗荷は毎年生える場所が変わるんだぜ、去年はあっち、今年はここに生えている。まるで意思をもっているようだね。」
「そうなんですか？」
「そう、不思議だろ。」
「不思議ですね。」
「そういやさあ…。」
「直ちゃん、いくつになったんだい。」
「今年で25になりますよ。」
「そうかぁ、どうりで綺麗になるはずだ。」
直子は誠二さんにそんなことを言われて、心臓がドンッとなって何も言えなった。誠二さんは、そんな直子をじっと見つめている。
しばらく経って、「お世辞ありがとうございます。」と私は言った。
「いや、お世辞じゃないよ。それに直ちゃんは頑張りやだからね、公認会計士になりたいんだろ。おれそれ聞いたとき驚いたよ。」
「でも、なりたいだけで、なれるかどうかは難しいんです。」
「いや、直ちゃんだったら、できそうだよ。意思が強そうなあ。」
「いえ、でも難しいですよ。」
「あはは、とにかく頑張ってよ。」と言って、はい、と言って、家に戻った。
心臓がまだどきどきしていた。誠二さんと話すといつも、そうだ。でも誠二さんにとっては私なんて小娘で相手になんてしてくれないだろうと直子は思っていた。それに誠二さんには恋人がいるようで、時々店にも顔をだしていた。清潔そうな誠二さんと対照的に、派手な水商売系の匂いのする女の人だった。
　家に帰ると「お母さん、もらってきたよ」と台所にぽんと茗荷を置いて、自分の部屋に戻った。心臓のどきどきはしばらく収まらなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7111y/

茗荷

2011年11月22日01時13分発行